



# 五百旗頭真の 大災害の時代

## 第29回 [消防団の苦闘]

# 安全確保し救援活動を

すさまじい津波の映像に衝撃を受けなかった人はいまい。1カ月を経て現地に赴き、私は改めて衝撃を受けた。とりわけ陸前高田の姿には気が遠くなりそうであった。岩手県陸前高田市の中心部（田代町）は、三陸海岸にあってかなり広い平野に恵まれている。その平野に、ビルが残骸がそこに残る以外、何も無い。高田の松原を消え、一面がけきの原であった。自衛隊の施設が再開した応急道路を、時にトラックが左右に傾きながら通るのみ、人の気配のない死のまち跡であった。

市街地は平野のかなり奥まった所であり、そのほかに3階建ての立派な市役所があった。その時、この市を市羽市長に聞いた。市長は屋上に逃れたが、津波はぐんぐん盛り上がり、3階の屋上を越えてきた。市長は死を覚悟したが、屋上には一部4階があり、その古い屋根の上には若者が市長を引っ張り上げてくれて九死に一生を得た。

それにしても、あの屋上の上まで、まち全体、平野全体を海がおおいつけたのだ。がれきしかない廃墟となるのである。その時、ふつうの人々はどうしていたのか。まちの人々が生死の際をさまよう時、どの被災地でも最後まで寄り添って助けようとするのが、消防団に協力する住民自治組織の消防団である。消防団員は、目とわかるのは、はたしてを組織して活動するので、プロの消防関係者のように見られがちだが、日常は普通の人々である。高田の分団長だった故大坂淳氏（当時54歳、今年1月死去）は、駅前商店街の写真屋さん、熊谷栄規氏（同44歳）は脱サラで居酒屋を営んでいた。それでいて、消防団員には

すさまじい津波の映像に衝撃を受けなかった人はいまい。1カ月を経て現地に赴き、私は改めて衝撃を受けた。とりわけ陸前高田の姿には気が遠くなりそうであった。岩手県陸前高田市の中心部（田代町）は、三陸海岸にあってかなり広い平野に恵まれている。その平野に、ビルが残骸がそこに残る以外、何も無い。高田の松原を消え、一面がけきの原であった。自衛隊の施設が再開した応急道路を、時にトラックが左右に傾きながら通るのみ、人の気配のない死のまち跡であった。

市街地は平野のかなり奥まった所であり、そのほかに3階建ての立派な市役所があった。その時、この市を市羽市長に聞いた。市長は屋上に逃れたが、津波はぐんぐん盛り上がり、3階の屋上を越えてきた。市長は死を覚悟したが、屋上には一部4階があり、その古い屋根の上には若者が市長を引っ張り上げてくれて九死に一生を得た。

それにしても、あの屋上の上まで、まち全体、平野全体を海がおおいつけたのだ。がれきしかない廃墟となるのである。その時、ふつうの人々はどうしていたのか。まちの人々が生死の際をさまよう時、どの被災地でも最後まで寄り添って助けようとするのが、消防団に協力する住民自治組織の消防団である。消防団員は、目とわかるのは、はたしてを組織して活動するので、プロの消防関係者のように見られがちだが、日常は普通の人々である。高田の分団長だった故大坂淳氏（当時54歳、今年1月死去）は、駅前商店街の写真屋さん、熊谷栄規氏（同44歳）は脱サラで居酒屋を営んでいた。それでいて、消防団員には

事には臨んで公に殉ずる思いが公務員に劣らず強く、わが身とわが家族を顧みず、奔走する。大坂氏は、妻に高田にある実家へお金を押しつけて家を出た。熊谷氏は「じゃあ、田舎に行くと書いたら声をかけて出た（NHK証言記録 東日本大震災）NHK出版」。

この地では地震の25分後に津波が来ると言われてきた。その前に、水門を閉めることが、消防の任務の一つである。熊谷氏は消防車で走って田代区域の水門が閉まっているのを確認した。大坂氏は消防署で、沿岸には地震の揺れで閉まらなくなった水門もあるとの情報を得た。このままでは団員にも犠牲者が出ることを考えた大坂氏は、車で市内を走り、即時避難を市民にも団員にも強く求めた。

消防の人たちが水門を閉める作業のため殉じたという話も聞くが、それは極めてまれである。一番早く津波が来た大船渡で30分後、仙台平野では1時間後、消防士・消防団員は、多くの場合、水門を閉じる作業を無事終えていた。ただ遺憾なこと、この度の津波は閉じた水門を軽々と乗り越え、水門は限られた効果しか持たなかったのである。もう一つ、より深刻な問題は、その後まにに戻って、まだ避難していない住民が多いこと、焦燥感をつららせた消防団員が、人々を無理に避難させたように追って回り、自ら津波につかまるケースが少なくなくなってきたのである。

### 殉職者25人にも 東日本大震災における殉職者 (死者・行方不明者)は、警察

よき判断を下した大坂氏であるが、自ら津波から逃げ切れなかった。駅前から本丸公園の丘に向かう大通りのどん詰まりの丁字路に着く前に津波が後から激走してきた。どちらに曲がっても駄目と覚悟した。が、子供の頃に遊んだ小さな路地の記憶が甦った。大坂氏は路地へ駆け込み、斜面を登る途中で水につかまった。だが左右両方から来た津波がぶつかって中和し、大坂氏は斜面から引きはがされず、濡れただけで済んだ。奇跡的であった。

「すべし山へ逃げろ」と団長が告げ、後から来る形となった熊谷氏の車は、とても逃げ切れず津波にのめられたものと大坂氏は判断せざるを得なかった。まちは15分の津波の底に沈んでしまった。

ところが熊谷グループは別の仕方で助かった。山まで逃げ切れないうちに大きな津波が迫ってきたところを見て、車の後ろに乗っていた団員が「ダメだ、無理だ、マイヤだ」と叫んだ。この地の誇るスーパーであるマイヤのビルがすぐ近くに見えた。その駐車場で走り込み、非常階段を駆け上った。踊り場まで上って下を見たら、今まで乗っていた車面が流されていった。水に追いつけられずに屋上に逃げた。水は屋上の手前で止まった。高田のまちも、もう終わりの丘に向かった大坂団長も逃げ切れなかったらどうと熊谷氏は思った。4人の消防団員のほか10人ほどの近所の人々がマイヤの屋上で夜を過ごすことになった。押し波が引き波に転じ、板に乗った人が、助けてと叫びながら飛び去った。どうすることもできなかった。

大災害の奇襲攻撃を受けた現地では、とりあえずそこに居合わせた人たちが頑張り他はない。コミュニティの住民と消防団員、そして多々ない消防署員と警察官で悲惨な戦いを強いられる。阪神・淡路大震災の体験から、消防、警察、自衛隊の第一線部隊は、それぞれに組織的改革を加えた。災害用装備の充実などもあるが、最も重要な改革は、全国的な広域相互支援体制の構築である。消防は、各自治体単位が基本であるが、「緊急消防援助隊」を1995年6月に創設し、消防庁長官の指示権が法制化された。2003年6月、東日本大震災にはその効があった。

### 甘え過ぎの社会

陸前高田市の中心をなす高田町には7600人が住んでいたが、1100人余りの犠牲者を出した。何らかの事情で、地震後一目散に逃げられなかった人々である。それには大坂氏、熊谷氏の夫人も含まれていた。両氏とも自ら犠牲になっていても不思議でない活動ぶりであったが、運命のいたずらで間一髪生き延びた。とはいえず、自ら自らの家族を顧みず、「コミュニティの人々の安全のために献身する消防団員の自己犠牲の衝動」、社会は甘え過ぎてはいけないうちではないだろうか。自らの安全を確保する消防団での救援活動のマニュアルを整備すべきである。

極端なケースが宮城県取市閉上にあった。一人のおはあさんが、長く暮らした地から離れて生き延びることを頑として拒否した。自分はこの世で死ぬという。周りの人たちが懸命に説得し、親しくしていた友人まで加わって一緒に逃げようと言っていたら、ようやく軟化した。では、その前にトイレへ、はあれを持って、と要望すべてを容れて出発するのに30分を要し

た。避難が遅れたことを津波に襲われ、一人が奇跡的に助かった以外、全員が犠牲となった（NHKスペシャル取材班「大津波―その時とはどう動いたか」岩波書店）。欧米であれば、老人の自由意思をドライに尊重するであろう。日本的なやさしさ、ウェットなみんな主義が、逆に皆の命を奪うことになった。事に臨んで30分対話するのはなく、目と口から一方的の場合の避難について話し合い訓練しておかねば、その瞬間に逃れることはできないことを知るべきである。

大災害の奇襲攻撃を受けた現地では、とりあえずそこに居合わせた人たちが頑張り他はない。コミュニティの住民と消防団員、そして多々ない消防署員と警察官で悲惨な戦いを強いられる。阪神・淡路大震災の体験から、消防、警察、自衛隊の第一線部隊は、それぞれに組織的改革を加えた。災害用装備の充実などもあるが、最も重要な改革は、全国的な広域相互支援体制の構築である。消防は、各自治体単位が基本であるが、「緊急消防援助隊」を1995年6月に創設し、消防庁長官の指示権が法制化された。2003年6月、東日本大震災にはその効があった。

それにしても、あの屋上の上まで、まち全体、平野全体を海がおおいつけたのだ。がれきしかない廃墟となるのである。その時、ふつうの人々はどうしていたのか。まちの人々が生死の際をさまよう時、どの被災地でも最後まで寄り添って助けようとするのが、消防団に協力する住民自治組織の消防団である。消防団員は、目とわかるのは、はたしてを組織して活動するので、プロの消防関係者のように見られがちだが、日常は普通の人々である。高田の分団長だった故大坂淳氏（当時54歳、今年1月死去）は、駅前商店街の写真屋さん、熊谷栄規氏（同44歳）は脱サラで居酒屋を営んでいた。それでいて、消防団員には



地震発生当初、災害対策本部が置かれていた市民会館を捜索する消防団員ら。岩手県陸前高田市で2011年3月13日、兵藤公治撮影

いおきへ、まこと ひょうご 震災記念21世紀研究機構理事 長、熊本県立大学理事長、日本政治外交史

陸前高田と同じく平野部が全滅状態となった南三陸町へ、緊急消防援助隊（食部・兵庫・鳥取隊）が到着するとの報を受け、小畑政敏消防団長（当時）は13日早朝、まちの入り口まで出迎えた。消防車面が50両も連なっているのを見て、涙を禁じ得なかった。頭張れ、もつぐん駆けつけるところ、それはかなり現実となっているのである。津波と瓦礫のなかで、東日本大震災、消防隊員死闘の記、旬報社。

政治外交史